担っていくつもりである。ちなみに日本人間性心理学会は，その第3回大会を名古屋大学で引き受けることになった。今年10月に開催される予定で，今その準備に臨床系全員で当たっている段階である。

6）公務の多忙のため，昨年はふたたび蓼科高原でもたれた，名古屋大学学生相談室主宰の，学生を対象とする「自己発見グループ」には参加できなかった。しかし本来的なエンカウンター・グループとはもちろん程遠いものではあるにしても，附属学校で，私は高校生を対象として「自己発見」といったテーマをかかげ，昨年10月以降，週1回の必修クラブを自ら担当する試みをはじめた。思春期をさまよう高校生との直接的なふれあいを意図するものであったが，それなりにかなりの反応があり，人間が生きていくことの不思議さ，おもしろさを，彼らと共に改めて感じさせられたことは，私にとって何よりもうれしい。人と人との生身（なまみ）のふれあいをこのときより一層大切にしていきたいと考える。

7）全国学生相談研究会議の第17回の集いを，今年も新春早々の江の島海岸で，東京工業大学のお世話でもつことができた。いつもながらのカウンセリングのこころを，今回は，たまたまこの3月退官されることとなった，東京大学佐治守夫教授と東北大学宮川知彰教授との対談の中に，まざまざとまた汲みとることができた。この席に司会の役割をになって，両先達の歩みに心うたれるとともに，佐治教授退官後，はからずもこの会議の会長の重責を背負うことになっただけに，これから一層の精進を誓う気持でいっぱいである。

8）誠信書房からは，九州大学成瀬悟策教授監訳になる，Hilgard 教授編，「アメリカ心理学史」が数年の歳月を経て，昨年9月ようやく刊行の運びに到った。この中で，格調高い Allport 教授の1939年会長講演を翻訳する機会を与えられたのは光栄である。「心理学者の準拠枠」と題するこの難解な講演の中に，往時のアメリカ心理学勃興の機運をよみとることができる。これらの伝統をうけつぎ，日本でのより独自の展開をはかることが，今の私たちに寄せられた期待であると私は考えたい。

（昭和59年8月7日）

研究経過報告 ― '82年秋～'84年夏 ―

小　嶋　秀　夫

〔児童発達観の研究〕　'83年4月にスタンフォードの行動科学高等研究所で開かれた「日本と米国における児童発達」会議に出席し，「社会および個人における信念・価値体系としての子育ての諸概念」と題する発表を行った。幸いにも，それはかなり多くの人に興味をもってもらえ，来年には，フリーマンから出る本の1つの章として現れると思う。それは概括的な話であったが，より分析的な話を，つぎの2つの学会・会議でした：　「江戸期の子育ての書に現われた乳幼児発達観」　第85回日本医史学会総会（84年4月，名古屋）；　「江戸期日本の子育ての書および医書における児童発達理論」　第29回国際東方学者会議（84年5月，東京）。とくに後者で受けた多くの質問によって，今後さらに進めるべき分析の視点に気付いたのは有益であった。さらに求めにより，これらの一部を噛み砕いたエッセイを単行本の1つの章（新曜社，1983）と雑誌（ライフサイエンス，1984）とに書いた。3年ほど前のと比較すると，いくらかましな形になってきたのではないかと思っている。児童心理学ハンドブック（金子書房，1983）の1つの章の論文でも，マクロ・システム（Bronfenbrenner）としての児童発達観の問題を論じた。

この領域でいま取りつかれているのは，1839年から10年間にわたって書き続けられた「柏崎日記」である。かねてより民俗学者によって注目され，最近でもお茶の水女子大で分析を続けている人がいる。しかし，それらの人とは別に私がそれを分析する意味はあると思う。いまは部分的な活字本に頼るほかはないが，自筆本で活字化されていない部分に必要な記述があるかも知れないので，なんとか必要な部分だけでよいから，読めるようになりたいと考えている。しかし，私の学習速度は遅く，まだ何年もかかるだろう。完全に個人的な好意から，この道での私の師匠役を買って出てくださった方を，やきもきさせているのは，まことに申訳ない次第である。さらに最近，ある歴史家が発見し研究書を出された「熊野観心十界曼荼羅」なるものの中の「人生の段階」図にも心をひかれている。外国のはかなり知っていたが，日本にそのようなものがあるとは思ってもみなかった。これらの領域への興味にしても，発達研究者としての立場は堅持しているつもりである。

〔家族関係〕　山田洋子・村上京子・河合優年との共同

による「母親－きょうだい間の相互作用に対する乳幼児の反応」の研究結果は，この学部発行の特定研究報告書（84年）に一応載せてあるが，正式にはまだ公刊の過程にある。引き続き，母親－きょうだい－乳児の三者関係についての短期縦断研究を行っている。11か月児を第2子としてもつ家族50組以上の協力が得られた。この研究には，上記3氏のほかに，この7月末まで11か月間私のもとに来ていたFogelパーデュー大学助教授にも参加してもらった。かれが開発した二者間の相互作用過程のマイクロ・アナリンスのプログラムを，三者間の相互作用に適用することになっている。

ついでながら，Fogelさんとは保育所における幼児－乳児のnurturantな相互作用の比較研究をすることにし，院生（加藤教子）にも加わってもらって研究を進めている。なお，nurturanceに関しては，「日本においてnurturantになって行く過程」という論文を書き，来年にローレンス・アールバウム社から出る本の1つの章となるはずである。また，家庭を中心とした「環境・経験変数の構成」（朝倉書店，1982），それに「家庭環境」（第一法規，1983）という分担執筆の論文が出た。

小児心身症の家族的背景の研究も続行中である。そのために構成したインヴェントリー（FRI）については，日本教育心理学会第26回総会（84年9月，京都）で久世敏雄・宮川充司と共同で発表する。現在は，国立名古屋病院を足場にして症例研究を重ねている。それには院生（内山伊知郎）の協力を得ているが，各方面から請求・問い合せがあるFRIの手引きを出すところまで，まだ自信がついていない。

最後に，第17回家族社会学セミナー（84年7月，瀬戸市）に招かれたことは，隣接領域の研究として尊敬しつつも十分な接触をもっていなかった私にとって，たいへん有意義な経験であった。今後の研究に生かしたいと願っている。

〔その他〕 '83年8月下旬から9月初めにかけて，コーネル大学のBronfenbrenner教授を招き，名古屋で講演会，セミナー，討論の機会をもてたことは，かれや私にとってだけでなく，教室内外の多くの人にとって有益であったと喜んでいる。かれが学術振興会に提出した報告書では，名古屋のことをほめすぎている。しかし，それは1つの目標を示唆しているのだと受け止めれば意味があろう。上記のFogelさんが11か月にわたりフルブライト研究員としておられたのも，お互いにとって大きな意味があった。非常に困難ではあるが，比較文化的研究をもめざしたい。この点に関して，ある日米比較についてのアメリカ人の論文に私がコメントしたものが，9月の*American Psychologist*に出る。また，発達と知能の2章を担当した概論書も出た（有斐閣，1984）。

（1984年8月16日）

研究経過報告――昭和58年度

田畑　治

1. カウンセリング過程の研究。この領域では〝フォーカシング〟に関する研究発表を2題行った。一つは「フォーカシングを適用した仮面うつ病婦人の心理治療過程」（日心第47回大会発表論文集，早稲田大学，昭和58年9月，742頁）であり，もう一つは「児童期に母親喪失体験をもつ中年婦人のカウンセリングの特徴」（日教心第25回総会発表論文集，熊本大学，昭和58年9月，830－831頁）として報告し，フォーカシングの〝ショート・フォーム〟（略式法）の可能性と限界を明らかにすることができた。なお，これらを一本化して，近年筆者が比較的対象を多くしてきている〝中年女性〟の生き方の問題ともからめて，専門誌にまとめて報告できれば，と考えている。

この領域でもう一つは〝夢分析〟に関するものである。この年度は2題発表することができた。一つはある重症対人恐怖症者のもので，すでに本紀要に発表ずみである（名古屋大学教育学部紀要―教育心理学科，第30巻，99－119頁所収，昭和58年12月）。もう一つは「性的問題をもつ中年婦人の夢とカウンセリング」というテーマで発表し，慶応大小此木啓吾先生のコメントをうける機会を得た（京大一泊臨床心理学研究会，昭和59年2月）。なおすでに終結している他のケースも含めて，これらは本研究紀要第31巻に，夢分析の論文として投稿する運びになっている。

2. 心理臨床家の養成，教育・訓練の問題。

この領域では，亀口憲治氏（福岡教育大）の「システミック家族療法を用いた登校拒否児の事例――逆説的課題の有効性――」（日心臨第2回大会，中京大学，昭和58年11月）のコメンテーターをする機会を得て，筆者自身この療法の独自性と可能性について学習することができ